

15 前立腺癌根治療法前アンドロゲン抑制療法を行った患者のテストステロン値の推移

武田 啓介・山口 峻介*・結城 恵理**
原 昇・西山 勉・高橋 公太

新潟大学医歯学総合研究科
腎泌尿器病態学分野
柏崎総合医療センター泌尿器科*
長岡中央総合病院泌尿器科**

2007年から2012年に当院にて放射線療法(HDR-BT, LDR-BT)施行時にLH-RHアナログを含む根治療法前アンドロゲン抑制療法(ADT)を行った限局性前立腺癌患者を対象とし、テストステロン値の去勢レベルは50ng/dL未満として治療前、治療3か月後、治療6か月後のテストステロン値の推移を検討した。

対象患者は100例(HDR-BT 68例, LDR-BT 32例)で、リュープロレリン投与(L)群は45例、ゴセリン投与(G)群は55例であった。去勢達成率はL群が治療3か月後は33例中20例(61%)、治療6か月後は42例中30例(71%)であり、G群が治療3か月後は40例中29例(73%)、治療6か月後は41例中34例(83%)だった。ADTにより7割以上の去勢効果が得られたが約3割の患者は目標とした去勢レベルに達しておらず、テストステロン値の経時的測定は重要と考えられた。

16 膀胱温存を目的とした、浸潤性膀胱癌に対する骨盤内血流改変術後動注化学療法の検討

北村 康男・信下 智広・山崎 裕幸
小林 和博・斎藤 俊弘・関 裕史*
松本 康男*・杉田 公*・川崎 隆**
県立がんセンター新潟病院泌尿器科
同 放射線科*
同 病理部**

【目的】浸潤性膀胱癌に対する動注化学療法の抗腫瘍効果および膀胱温存治療としての有効性を検討した。

【方法と対象】動注の方法は左右の上殿・下殿動脈を金属コイルを用いて血流を遮断し、抗がん

剤を内腸骨動脈から投与。MVAC療法ではMTXとVBLを経静脈、ADRはbolusで、CDDPは60分にて動注、GC療法は、GEMが静注、CDDPは60分にて動注し、原則として3コースとした。効果判定は2ndTUR、膀胱鏡、尿細胞診で行った。2004年7月以降に動注化学療法を施行した28例を対象とした。初診時年齢は43-86歳、cT2が23例、cT3が4例、cT4が1例であった。cN0は26例、cN1は2例(cT3, cT4症例)であった。

【結果】化療後の治療効果判定は、CR17例、PR10例、PD1例であった。化療後追加治療として、膀胱部分切除2例、放射線照射15例施行した。CR症例のうち10例が経過観察、7例が放射線照射を施行した。PR症例全例に放射線照射を施行し、CR6例、PR3例、NC1例であった。

【考察】動注療法単独および放射線療法を併用することにより23例のCRが得られ、浸潤性膀胱癌でも膀胱摘出が回避可能であった。

17 食道がん根治照射後の初回再発の上腹部リンパ節転移に対する放射線治療成績

末山 博男・福田 貴徳・齋藤 紘文
県立中央病院放射線治療科

2006年～2013年6月末まで食道がん根治照射例で、初回再発が上腹部リンパ節転移例は6例であった。全例男性で平均年齢58(51～76)歳で、初回再発までの期間は9～120か月で、2例は1年以内であった。1例を除き5例はすべて化学放射線療法で、照射はAHF(1日2回照射)、同時併用した抗がん剤はすべてlow dose FPであった。現在照射中の1例を除き5例では、照射野内制御率は100%で、1例のみが照射外リンパ節再発を生じた。5例中3例が無病生存中(再発から18～33か月)で、1例が他病死(大動脈瘤、60か月)、1例が原病死(3か月)であった。初回再発が上腹部リンパ節転移のみであれば、化学放射線療法で比較的良好な治療成績が得られる。